

## B：宮城県コース

橋本 重明（1970・法）

仙台空港をこのツアーの集合地に選んだ私は、まず空港のロビーで、あの時の津波の水位が 3m02cm であったことを知った。今ではすっかり改装された 1 階のロビーの柱にその高さの位置が示されていて、空港利用者が実感できるようになっていた。自衛隊や米軍の復旧作業で一早く再開できた様子も「復興の歩み」と題して写真パネルで紹介していた。しかし、その後訪れた被災地では、すっかり復旧した空港とはほど遠い現実を見ることになった。

1 日目の松島は、他の所に比較すると被害は少なかった。観光客の賑いもあると感じた。私が 2006 年に拓本に採った雄島（おしま）の奥の細道句碑も冠水したが、無事だったことを公園管理事務所近くで出会ったシルバーのボランティアさんから聞いた。土曜日だったこともあり、事務所は休業日で、直接私に採拓許可を出して下さった方に会えなかったが、その事務所の建物もシャッターが破損したものの無事だった。

雄島と陸地をつなぐ渡月橋という朱塗りの小さな橋は、インターネットの映像で見た通り、流失したままになっていた。そのシルバーの方によると橋の架橋工事よりももっと優先する復興の仕事に取り組んでいるとのことだった。

2 日目、南三陸町。無惨に折り曲がった鉄骨だけが残された町の防災対策庁舎。町の中心であったと思われるが、あたり一面流された家々の基礎部分がなんとか確認できる程度で、地上には何もない。所々にまだ瓦礫の山や重機も見える。数台のバスが、その前に停車していた。私達もバスを降りた。お花や千羽鶴、そして卒塔婆が置かれていた。私はしばらく合掌した後、この三階建の建物を直下から見上げてみた。報道で「〇〇m の高さの津波」と聞いても実感がわからない。ところがその建物を実際目の前にしてみると数字は何であれ、とんでもない津波であると知り、絶句した。この屋上に逃げた人々の恐怖はどのようなものであったのだろうか。防災対策庁舎ただだけに犠牲者の無念は計り知れない。涙で目が潤んだ。

石巻ではかろうじて建物は外見上残されているが、明らかに居住者がいないとわかる廃屋がぼつりぼつりと見える。また一方で、ぎっしりと詰めて建てられたプレハブの仮設住宅の棟々も、バスの車窓から見えた。

こんな中、懸命に復興に取り組んでいる人々の姿もしっかりと目に留めておかなければならない。被災し現在も苦労が続く毎日の中で前向きに頑張っておられる二組の校友の方にお会いできたことを参加者全員が喜んでいただけない。石巻の木村さん（'77 経済卒）、名取の佐々木さんご夫妻（'77 産社卒・'76 文卒）である。ともに水産食品工場を一瞬にして失ったが、再建に向けて邁進中である。このような逞しい校友がおられることを立命人として誇りに思う。帰ったら一早く、私のまわりの人に知らせたいものだ。

最後に「この復興支援事業は最低 10 年は続けたいものだ」と随行された校友会事務局の村上さんがおっしゃっておられた。そのように息の長い支援が必要で、国や自治体は言うに及ばず、校友という縁で結ばれた者同士が、このようなときに助け合わないでどうするのだとつくづく感じた。

現地宮城県校友会の皆さん、とりわけ大先輩の会長さんや幹事長さんにお目にかかれて、若かりし頃のお話を聞けたり、また卒業したての若々しい後輩と露天風呂で少しであったけれどお話ができたことなど、まさに「立命人」としての「赤き血潮」が胸に満ちたツアーであった。